

エヴァンジェリスタ

2004(平成16)年12月24日鑑賞(ユウラク座)

★★★★



監督＝サイモン・フェローズ／出演＝ヘザー・グラハム／ジェームズ・ピュアフォイ／アンディ・サーキス／デヴィッド・ヘミングス／フィオヌラ・フラナガン／ステラ・スティーヴンス (ハビネット・ピクチャーズ、メディアボックス配給／2004年イギリス映画／95分)

……この映画では、墮天使＝悪魔＝「ルシフェル」の知識が必要。また映画のタイトルである『エヴァンジェリスタ』＝福音伝道師＝悪魔の代理人＝ルシフェルの代理人という理解が必要。そしてこの映画のテーマは体外受精とDNA 適合操作という恐ろしいもの。不妊に悩む仲睦まじい夫婦が人工受精によって子供を授かったものの、さてその子供は誰の子……？ 『ローズマリーの赤ちゃん』(68年)を彷彿させるちょっとコワイ映画に、セクシー美女ヘザー・グラハムが挑戦しているが……？



ヘザー・グラハム主演に注目！

そもそもこのタイトルだけでは一体どんな映画かサッパリわからない。私にわかったのは、ヘザー・グラハム主演ということだけ。

ヘザー・グラハムといえば、中国の陳凱歌^{チェンカイコー}監督がはじめてハリウッドに進出してつくった映画『キリング・ミー・ソフトリー』(01年)での、何とも魅力的で刺激的なベッドシーンが強く印象に残っているとびきりの美人女優。「美人女優大好き人間」の私としては、ちょっと怖そうな映画だなと思いつつ、美人女優見たさに、つつい映画館へ……。



エヴァンジェリスタとは？

映画上映前にパンフレットを買って読んでいると、その1頁目に「本作を見る前に必ずお読み下さい」と書いてある。映画の重大な秘密が解説されているので、

「映画を見る前に読まないで下さい」と書いてあるパンフレットは多いがこれはその逆。そしてそこには、「知っておきたい“ルシフェル”の知識」として、「ルシフェルはその傲慢さで神の逆鱗に触れ、天から追放され墮天使＝悪魔となった」と解説されている。そう、まずは、この墮天使＝悪魔＝ルシフェルというものの存在を知ることがこの映画を理解する第一歩なのだ。

エヴァンジェリスタとは「福音伝道師」のことで、この映画では、エヴァンジェリスタ＝悪魔の代理人という意味で使われている。

悪魔の代理人とは誰か？ サマンサがそのお腹に宿した子供は一体誰の子供なのか？ またその子供を生もうとするサマンサは、ひょっとしてルシフェルの子供を生むために人工授精とDNA操作によってルシフェルの代理人となったのか？ そう考えると思わず背筋がゾーとしてくるが……。

理想的な夫婦像にも悩みが……

この映画の主人公であるサマンサとその夫クレイグ（ジェームズ・ピュアフォイ）は、共働きの仲のいい夫婦。そのまま日本の物語に持ってきて通用するような、仲睦まじい典型的な若夫婦だ。しかしこの若夫婦にも1つの悩みが……。それは子供がいないこと。不妊症に悩む夫婦は世の中に数多く存在しているが、このサマンサとクレイグの夫婦は、レイクビューというまちで女医のリーズ（デボラ・ウェストン）の診察を受けた結果、体外受精をすれば夫婦の間に子供が授かる可能性が非常に高いという報告を受けた。これを聞いてサマンサとクレイグの2人が喜んだのは当然。本心から子供を欲しがっていた2人は、忙しい仕事の都合をつけて体外受精の手術を受けるためレイクビューへ行くことに……。

人工受精の可否とそれを望む夫婦の存在

この映画のテーマは、人工受精とDNA操作によって墮天使＝悪魔＝ルシフェルの子供を宿すことになった主人公は？ということ。サマンサとクレイグの若夫婦は、人工受精（体外受精）によって子供が生まれる確率が高いと聞くと、すぐにその話に乗れ、トントン拍子で医学的処置を進めていった。日々大きくなっていくお腹を見て、これをさすりながら夢をふくらませていくサマンサ。しかも途

中で双子とわかってからは狂喜乱舞し、双子のためにベッドを2つ整えるなど、準備万端すべてオーケーという具合。少なくともこの若夫婦は、ニューヨークに住むアメリカ人でありながら、神の摂理に反する抵抗感はない様子……。

キリスト教を前提としたキャラ役2人の登場！

この映画には奇妙なキャラクターの人物が2人登場する。その1人シドニー（デヴィッド・ヘミングス）は、いわばルシフェルの崇拝者であり、サマンサに悪魔＝ルシフェルのDNAを受胎させて、ルシフェルのクローン創造を目論む人物。しかも、このシドニーは現実社会では大企業家であり、作家を目指すクレイグにとって好都合なことに出版業もやっている有力者だった。こんなシドニーがクレイグの作家としての才能を認め、10万ドルの前金を出すと約束したのだから、クレイグはたちまち有頂天。サマンサもそんなクレイグを祝福したが……。

他方、もう1人奇妙な人物は、シドニーと対置される神父カーロ（アンディ・サーキス）。この人物は犯罪者＝「フードの男」として登場するが、このカーロ神父は、サマンサがお腹に宿した子供はルシフェルの血液を使い最先端のクローン技術によって生まれようとする悪魔の子供であると告げ、毒を飲んで、その子供を墮ろせと迫った。さて、サマンサはどうするのか？

シドニーの説明とカーロ神父の説明の両方を聞けば、サマンサの頭が混乱するのは当然。私でもどちらが本当か一瞬ワケがわからなくなるが、冷静に考えれば多分カーロ神父の話が本当らしいとみえてくるはず。しかしそうかといって、毒を飲んで子供を墮ろすなどという決心ができるはずはない。その結果起こってくるさまざまな事件とは？ スクリーン上ではさまざまなストーリーが展開されるが、それらを理解するためにはシドニーとカーロ神父という2人の人物を中心とするキリスト教を前提としたキャラクターの正確な把握が必要だ。

夫婦の行き違いはどこから？

レイクビューで人工受精の手術をうけて自宅に戻ると、ニューヨークの自宅は何者かによって無茶苦茶に荒らされ、とても住める状態ではなくなっていた。そんな中、あのレイクビューで見た、湖畔に面した理想的な物件が格安な条件で賃

借りに出ていると不動産屋のベティ（ステラ・スティーヴンス）から情報が。さらに、この物件はその後格安で売却されることに……。こりゃ何か怪しいのでは、と考えて当然だが、そこまで考えが至らないサマンサとクレイグはとにかく前向きにそしてまっすぐに。その結果、湖畔にあるこの立派な物件は、今はサマンサとクレイグ夫婦の生活の拠点となったが……？

夫が目指す仕事は作家だが……

作家としての能力がシドニーに全面的に認められたクレイグは今や有頂天。一時のスランプを脱して、今やこの大邸宅の中でまさに一流作家気取りの毎日だ。頭の中に湧いた構想を次々とパソコンに打ち込んでいくのに忙しくなり、今は妊娠して大きなお腹を抱えているサマンサに対してかまう事も少なくなってしまう。そんなクレイグは、シドニーからやれ出版記念パーティーだ、やれサイン会だと持ちかけられて得意満面。クレイグがどちらを優先したのかは、そりゃ明白だろう。その結果、それまでの仲睦まじい2人の仲は……？

怖いシーンは目をふさいで……？

パンフレットには『『ローズマリーの赤ちゃん』『エクソシスト』『オーメン』——恐怖のDNAはこの作品に受け継がれた！ 衝撃のラスト5分間！ 貴方は耐えられるか！』と書いてある。

怖いシーンが大キライで、そういう場面になると目をふさいでしまう私は、いよいよか、いよいよか、と思いながら目をふさぐ準備をしていた。12月22日に観た日本映画の『着信アリ2』（04年）では、半分位は目をふさいでいたため、ハイライトシーンはほとんど観ていないという状態だった。しかしこの映画はそれほどひどいことはなく、ほとんどすべて大丈夫。ただ最後の5分のうちごく一部だけは目をふさいで観ていなかったが、それほど怖いシーンの連続ではなかった。スクリーン上には、出産4年後の丸々と太った2人の可愛い双子の女の子が登場するが、彼女たちの正体は一体……？

まあ、そこらあたりは映画を観てのお楽しみに……？

2004(平成16)年12月27日記